

島流し おみやげ話

岡山空港から直行便(チャーター機)で行く八丈島ツアーに参加した。島は羽田から50分かかるが、岡山空港からは65分まで着いた。島は地形的には、北西側の八丈富士中心の地域と、東南側の三原山の山塊地域、およびこの二つの火山の裾野が合流する平野部分の三つの地域に分けられる。

海上を覆う雲を抜けた着陸機は、左に八丈富士、右に三原山を見ながらこの平野にある空港に着陸する。

空港で待機していた観光バスは、八丈町営のもので、ガイドさんは「町営なので、私は町の職員(地方公務員)です。ガイドの仕事をしないときは、(観光地の)樹木の剪定や草刈り作業を手伝うこともあります」と自己紹介し、車中の空気を和らげる。バスは東側の三原山へのつづら折りを登り、登龍展望台に案内される。

ここから見下ろす空港とその向こうに見える八丈富士と八丈小島が美しい。

沖で見たときや鬼島と見たが来て見りゃ 八丈は情け島 大和おのこの 度胸があれば 越えておじゃれよ黒瀬川

(八丈シヨメ節)



この島は島流し(遠島)で知られるが、江戸初期から明治初期までの265年間に約1900人が流されたとの記録がある。江戸から黒潮(黒瀬川)の荒波を越え、命がけて着いた流人が見た島はさぞかし怖い鬼島に見えたことだろう。しかし、住んでみれば八丈は「情け島」だったとシヨメ節は唄う。

というのは、上陸させられた流人には、村の掘立小屋が与えられ、「これからは自力で生きて行け」と放置されたらしい。もう牢獄に繋がれることはなく、後は島民との人間関係でいかに生きるか、その生きる力が問われることになったのだ。

そして流人を受け入れた島人は、ガイドさんが教えてくれたシヨメ節のセリフのようにあながい寛容だったようである。御用船の舟預かり奉行であった服部家跡のソテツの庭園に、詠み人知らずの次の歌が掲示してある。

嬉しさを人にも告げん さすらへの みゆるしありと 赦免花咲く

八丈島ではソテツの花を「赦免花」とよび、この花が咲くのは赦免状が届く前触れだと言われていた、この花は数十年から四十年ぶりにしか咲かないのだ。

運よく生きていくうちに赦免され、島を去る人を祝った「赦免料理」が今も残っている。このことは、その日を迎えた人の別れを惜しむ素晴らしい出会い(関係)が、流人と島民の間に多くあったということである。

流人と言えは悪人のみを連想しがちだが、関ヶ原の戦いの敗者として八丈送りとなった宇喜多秀家などのいわゆる政治犯もいた。また幕府に批判的だった僧侶や文人(学者・芸術家)、あるいは綱吉の代の「生類憐みの令」に触れ、自宅の井戸に猫が落ちて死んだだけで遠島されてきた人もいる。

これら流人が島にもたらしたものは、芋焼酎の製法、池を造る技術、豆腐の製法、養蚕(養蚕技術の発達は八丈島特産「黄八丈」の発展に寄与した)など幅広く多い。また島民に学問や詩歌管弦の指導をした風流な流人や、腕の良い大工の棟梁もいて、その技術が多くの島民に伝えられたりもしている。

「良い出会いがあったら、自分をほめよ」という言葉がある。どんな素晴らしい人と出会っても、失礼な態度をとればその人から怒りなど悪いものしか引き出せない。流人が島に貢献できたのは、島人に良いものを引き出す力があつたからだ。

年間降水量3500ミリの八丈島で三日も晴れが続く日は滅多にないと、私たちの日頃の心がけの良さをほめながら、別れの挨拶をしたガイドさんは、「私も自分のルーツをお寺で調べてもらいました。その結果、父から遡って七代前の祖先が江戸から遠島され、その子孫であることが判りました」と話してくれた。遠島の理由は五人組(江戸時代の互いを監視し合う組織)で、五人組の内の誰かの違法行為であるらしいと言った。七代前の祖先のことはいえ、自分のプライバシーに関わる話を隠さず語ってくれたその人柄に、私は表現し難い魅力を感じながら、その心地よさを胸に帰路に就いた。

以上、流人の島を中心のみやげ話となった。もし再渡航できたら大物釣りのみやげ話を書いてみたい。 **森 口 章**



宇喜多秀家像 愛妻の豪姫は前田利家の四女。その縁あって遠島後も前田家からの仕送りが長く続いた。秀家は遠島50年を経て84歳で死去、豪姫との再会の夢は叶えられなかった。島に作られた像では、二人は仲良く並び、岡山の方向を向いて座っている。
*遠島された人の島の生活については『無暁の鈴』西條奈加著に詳しい著述がある。